

---

# 夏の日の出来事

Y Y

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏の日 の出来事

### 【Nコード】

N9325E

### 【作者名】

YY

### 【あらすじ】

この世には知られていない不思議がたくさんあります。あなたは知っていますか？時を遡る神社の話……。小学生の時に事故で両親を亡くした祥介と幼なじみの小奈美。祥介は小奈美を悲しませないよう、将来結婚する約束をする。しかし、高校生になった二人に再び事故の魔の手が……。！？

## プロローグ（前書き）

全六話構成です。

## プロローグ

### プロローグ

貴方は知っていますか？

世の中には知られていない不思議がたくさんあります。

どこかに通じる秘密のトンネルや、こことは違った別の世界への扉。神様になる事の出来る杖や、人の一生が既に記されている石版。

そんな不思議は数多くあります。

そんな知られざる不思議の中に、小さな町に古くから伝わる神社があります。

この神社には、時を遡ることが出来るといった『迷信』があります。

そう、『迷信』です。

しかし、どんな『迷信』も『迷信』になる理由が存在します。

この神社は今、取り壊しを待つばかりの廃寺となって既に数十年になります。

過去に遡って、無事還ってきたものはいないという『迷信』がある『由緒正しかった』神社です。

その『由緒正しい』神社は、誰が建てた物なのかもわかっていません。

では一体、還ってきた者のいない『迷信』に、どうやって過去を遡る、という『迷信』がついたのでしょうか。

誰も知らない『由緒正しい』神社は、どうして『由緒正しい』のでしょうか。

貴方は知っていますか？

じりじりと暑い日差しが照りつける晴れた空。

照りつけられる日差しは、屋外にいる人間に等しく降り注ぐ。

何ら不思議のない夏の情景。

セミはミンミン鳴くし、歩く人達はみんな汗を浮かべている。

この町は、特に夏が暑い。

最近は温暖化とかいうせいで、ますます暑くなって来ているらしい。

俺は今、そんな自分の生まれ育った町の商店街を歩いている。

人の賑わいはそれなりだが、去年行った巨大な都心程じゃない。

当然といえば当然のことだ。

こんな都心から外れた町に、人が集まってくる筈もない。

この町には、コンビニだって1件しか無いし、大きなデパートも無い。

ちよつと大がかりな買い物しようと思ったら、電車で2時間は移動しなくちゃならないだろう。

ホントこの町は、何にも無いし不便極まりない。

この町にある特別なものといったら、過去に遡ることが出来る、とかいう『迷信』がついた古い神社くらいだ。

その神社も、今は誰も近寄らない。

もちろん誰も信じちゃいないからだ。

一時は、それで町興しの話が出たが、結局流れたらしい。

俺は、その神社の事は信じちゃいない。

だいたい、言い伝えでは還ってきた者はいない、なんて言ってるのに、どうして過去に行けるなんてわかるんだかわからない。

何でも、由緒正しい神社ではあるらしいが、どれも眉唾もののお話で、最近は確かめに来る奴すらない。

さつきも言ったが、この町に来るには、電車でも数時間は要するからだ。

好き好んでそんなところに来る奴はそういない。

そんな町だから、クーラーが効いた涼むのに最適な場所など無い。

全くもって不便だ。

そもそも、『待ち合わせ場所』まで行くのに、この暑い中歩かなきゃいけないのが一番不便だ。

俺は、商店街を抜け、この町唯一の、噴水のある公園に向かう。

この町で生まれて早17年。

既に高校生となった俺は、人一倍暑さに弱い。

だが、俺はこの町が嫌いじゃない。

そう思えるのは、これから向かう先に待っているであろう人物のおかげだ。

俺の名誉のために言っておくと、俺は遅刻してなどいない。

むしろ、約束の時間の10分前には着くだろう。

それでも、これから行く先で待っている『彼女』は、俺より後に来たためしが無い。

1時間も2時間も前に行けば、あるいは『彼女』より早く待ち合わせ場所にいられるかもしれないが、そうまでするつもりはない。

そこまでして先に着いても、何かに負けた気がするし、何より、彼女は俺が来るのを嬉しそうに迎えてくれるからだ。

もう公園の入り口まですぐそこだ。

中央に噴水のある、たいして大きくは無い公園。

公園に入り、噴水に向かう。

その噴水の近くにあるベンチ、『彼女』の定位置と化しているその場所に、今日も『彼女』は座っていた。

『彼女』は、決まって俺が来るまで噴水で吹き出している水を眺めている。

そのうち、近づいてきた俺に気付いた『彼女』は、いつもの微笑みを浮かべて立ち上がる。

「おはよう！祥くん！」

「おはよう、小奈美」

やや茶色がかったロングの髪に、整った顔立ち。

スタイルも良いのだが、よく

「ダイエットする!」

などと言いつ出す。

だが、俺としては、その必要があるのか疑いたくなる。

今日の小奈美は、ピンクのフレアスカートに、半袖タイプの服を着ている。

肩からあらわになっている白い腕は、俺でなくとも護ってあげたくなるほど細い。

スカートから伸びる白い足は、綺麗の一言に尽きる。

だが、出るところは出ており、傍にいる俺としては、心臓のアイドリングが上がrippばなしになり、目のやり場に困ることもしばしばであり……

「……くん、祥くん？」

さらに彼女は俺の幼なじみにしてお隣さんでありそもそも……

「祥くんってば!!」

「うおおおっう!」

俺は、突如眼前に現れた天使、いや小奈美に驚いた。

「な、何だ小奈美？」

「何だ、じゃないよう！急に私を見つめて黙るんだもん」

少し膨れてみせる小奈美だが、その若干頬を膨らませた顔もまた可愛い……いやいや何をノロけてるんだ、俺は。

「ほら、また黙る！」

「ああ、すまんすまん。今日も小奈美の可愛さに見とれてた」

「しし、祥くんっ！な、ななな何っいいいい！？」

小奈美は顔を赤くしてわたわたする。

「も、もうつ！いつつもそんな嘘ばかり！」

小奈美は、顔を赤くしながらそっぽを向く。

小奈美は、俺から見ても純情で、こういう言葉は何度言っても慣れない。

ちなみに、俺は小奈美に嘘を言った覚えはその噴水にいるであろう細菌ほども無い。

元来、俺は恥ずかしがり屋だ。

自分で言っけて悲しくなるが……。

そんな俺だが、思った事は正直に言うようにしている。

つまり、先程の言葉も、小奈美の言う『いつも』も、俺の心からの声である。

小奈美は、恥ずかしさからか、自分の綺麗さを自覚していないからか、この手の言葉は滅多に素直に受け取らない。

だが、そんな小奈美だからこそ、俺の好きな小奈美だと思う。

言うまでもないが、俺たちは付き合っている。

俺たちは、物心ついた時から一緒にいた。

家が隣通しなのもあって、家ぐるみのお付き合い、なんてのも多かった。

だが、俺たちが小学4年生の時、そんな家ぐるみのお付き合いで行った旅行の帰りに、事故にあった。

車と車の交通事故。

相手は大型トラックの運転手で、飲酒運転だった。

車は大破し、あたり一面炎上した。

俺と小奈美は、衝撃により車の窓から放り出された。

地面に落ちた時も、凄く痛かった筈なのに、自分に何が起きたのかわからなかった。

ただ、隣に落ちた小奈美に、車の破片が飛んでいくのがわかって、必死に背中を庇った。

小奈美を庇った俺の背中には、車の破片が刺さり、血がドロドロ流れたのを覚えている。

だが、俺はその時、背中への痛みよりも、俺の腕の中で泣く小奈美を見ている事の方が何故かずっと痛かった。

だから俺は、ずっと小奈美を抱きしめ、

「大丈夫、大丈夫」

と言い続けた。

その時の傷は、今でも背中に残っている。

その後、俺たちは、相手からの賠償金と両親の生命保険、という多額のお金と引き替えに、家族を失った。

俺たちは、一夜にして天涯孤独になった。

そう、俺たちには運悪く、近しい親戚がいなかった。

探せばかなり遠い親戚はいるのかもしれないが、少なくとも、20親等以上は離れているらしい。

だが、幸いなことに、俺たちの事故の裁判を受け持ってくれた弁護士が、俺の父の友達で、俺と小奈美の身元引受人になってくれた。

といっても、その人は数年後には仕事の都合で海外に行くことになってしまった。

俺たちは、まだ外国に行くには不安があり、結局、二人で日本に残る事にした。

何か困った事があつたら、この人に頼りなさい、とその人の友人を数人紹介してもらった。

俺の父は中々人望が厚かつたらしい。

とにかく、それ以来、俺たちは基本的には二人で協力して生活してきた。

俺が、小奈美とちゃんとした意味で付き合うようになったのは高校生からだが、実際のプロポーズのようなものはあの事故の直後に言った。

今思うと、自分でも恥ずかしいのだが、病院で入院していた時、小奈美は悲しそうに呟いていた。

「……一人になっちゃった……」

何の表情も浮かべずに、ただ虚空を見つめ続ける小奈美。

そんな小奈美を見ているのは、俺には耐え切れなかった。

だから、言ってしまった、いや、言う事が出来たんだ。

「何言っただよ小奈美、俺が傍にいるよ!」

「……でも、もう私には家族はいない……」

「じゃあ、俺が家族になる」

「……本当？……どうやって？」

「……………」

「……やっぱり無理だよ……」

「小奈美が……」

「……？」

「小奈美が俺のお嫁さんになってよ」

「……え？」

「俺がずっと傍にいて、家族になるから、小奈美が俺のお嫁さんになってよ！……」

ポカン、とする小奈美。

「な、何言ってるの祥介くん？」

この頃、小奈美はまだ俺のことをそう呼んでいた。

「俺が、ずっと小奈美というから……将来結婚してよ！」

俺はこの時、小奈美の傍にいてやるために、ただ本当の家族になるために、唯一思いついた事を言っていた。

小奈美に、表情が戻ってくる。

唐突に、明るくなった声で小奈美が答える。

「……幸せにしてくれる？」

「……え？」

「『祥』くん、よろしくね」

「っ！あぁ、よろしく！！」

この時、俺は自分が何かを約束をした、ということより、この時の小奈美の笑顔のほうが印象深かった。

だが、歳を重ねるにつれ、自分がした約束が実はとんでもなく重いことだというのに気付くのもそう先のことでは無かった。

そこで俺は、高校生になる時、小奈美とお揃いで腕時計を買った。

小奈美は左利きなので『右手』に、俺は右利きだから『左手』に。

特に特別な細工のある時計ではないが、俺にとっては、婚約指輪のようなものだった。

その意図を、小奈美も気付いているらしく、嬉しそうに受け取ってくれた。

お互い、その時計は肌身離さず着けている。

俺達は、高校を卒業したら籍を入れるつもりだ。

あと1年。

長いようで短かったが、きっと籍を入れたとしても俺達の生活は変わらないのだろう。

変わるとすれば、小奈美が俺の家に住むくらいか。

そうそう、お互いの決め事として、卒業するまではお互い自分の家に住むようにしている。

周りや学校が、同棲している、なんて騒ぎ出すと面倒だからだ。

小奈美は、毎日ご飯を作りに来てくれるから、ほとんど同棲してるようなもんだけど。

まあそんなわけで、対外的には、俺達が隣同士に住んでいることは伏せている。

そのため、今日みたいに外に出る時には、隣同士なのに、待ち合わせ場所で待ち合わせるなんていう『偽装工作』をしている。

最も、この待ち合わせ自体は、小奈美が非常に気に入ってるため、とやかく言つつもりは無い。

実際、何度かこの偽装工作のおかげで助かった事があったし。

「祥くん、行こっ！」

微笑みながら、俺の手を引く小奈美。

今日は、もう何回目になるかわからないデートだ。

「そうだな。今日は何処行きたい？小奈美」

「んーとねえ……」

顎に人差し指をあてて考える小奈美。

そんな可愛い仕草をしながら、小奈美は俺と商店街に向けて歩いていく。

ここまでは、ごく普通の、ありふれた平凡な日常だった。

だからこの時の俺は、知りようがなかったんだ。

これから起きる悲劇を。

過去に戻ってもやり直したくなる出来事を。

## プロローグ（後書き）

かなり前から考えていたお話です。完結のメドがたったので、良かったら読んでみて下さい。よろしければ、感想待ってます。

## 祥介編 第1章

### 祥介編 第1章

突然だが、小奈美は少し、いや、かなり嫉妬深い。

小奈美は、俺が誰か他の女の人と話しているだけで、

「今何の話してたの？」

とか、

「祥くん色目使われてた」

とか、

「私なんてどうでもいいんだ」

とか、

「浮気」

とか言われる。

だから、今の小奈美の機嫌が急に悪くなったのも、決して俺のせいじゃない、と思う。

いや、思いたい。

思わせてくれ。

「小奈美？まだ怒ってるのか？」

「怒ってないもん！！」

そう言う奴程怒っているということを俺は良く知っている。

俺はついさつき、たまたま女の人とぶつかり、その人が落としたハンカチを拾ってあげた。

俺がしたのはただそれだけのことだ。

「ただ、ハンカチ拾っただけじゃないか」

「……………」

「俺は小奈美以外の奴と付き合う気なんかないよ？」

「だって……祥くんかつこいいから……すぐ誰かに取られちゃいそうで……」

「おいおい……」

俺に言わせれば、それは俺が言いたい、というような言葉だ。

そもそも、うちの高校に一体どれだけ小奈美のことが好きな奴がいると思ってるんだ。

小奈美は知らないだろうが、うちの高校には小奈美のファンクラブまで極秘裏に出来ているらしい。

俺は、そいつらに目を付けられている。

まあ、いつも小奈美と一緒にいるから仕方がないと思うが。

俺たちは、公園を出て、商店街を歩いていた。

いつもと変わらないデートコース。

特に予定が決まっていなければ、二人でこうやってあちこちぶらぶらするのだ。

今日も一日、そうしようと思っていた。

「おつ、祥介君に小奈美ちゃん。今日も仲がいいね」

八百屋のおじさんが、俺たちに気付いて話しかけてきた。

「えへ、ありがとうございます」

小奈美は、若干照れながらも嬉しそうに答える。

俺たちは、よくこうやってからかわれる。

まあ、昔からずっと小奈美と一緒にだったから気にはならないが。

ちなみに、もし一人で歩いていたりすると、

「喧嘩でもしたのかい？」

などと『必ず』聞かれる。

周りがそう思うほど、俺は永く小奈美と一緒にいるのだ。

「今日もデートかい？」

「え、ええ、まあ」

俺は曖昧に答える。

いくら何でも、他人様に面と向かって『デート』と言える程俺は神経が図太くない。

「仲が良いのは良いことだよ。まっ、今度何か買いに来た時にはサ―ビスしてあげるからいつでもおいだよ」

「はい、ありがとうございます」

昔からの俺たちの境遇を知っている人は、こうやってよく声をかけてくれる。

そんな人たちは俺たちにとって、いわば親みたいなものだった。

この八百屋のおじさんも、そんな人の一人である。

「まあ、車に気おつけていきなよ」

「はい」

そう言つて俺たちは八百屋さんを後にする。

「車か……」

「嫌でも思い出しちゃうね……」

俺たちは交通事故で家族を亡くしてる。

車の危険性は十分承知しているつもりだ。

だから、

俺は、

今、

いち早く、

自分の、

後ろから、

近づいてくる、

トラックの音に、

気付いた。

ゆっくりと、

振り返る。

「危ない!!」

誰かの、

叫び声が、

聞こえる。

それは、

スローモーションで、

自分達に、

突っ込んで、

来る。

逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる  
逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる  
逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる  
逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる

逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ  
逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ  
逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ  
逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ  
逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ

[illegible]

「ドガアアアアアアアアアアアン!!!!!!!!!!」

トラックが突っ込んできた。

前にも感じた事のある、よくわからない虚無感。

今自分の身に起こっていることがわからない。

「大丈夫かい!?」

……誰だ?

……ああ、八百屋のおじさんか。

「おい! 祥介君! ?」

「だ、いじよ、うぶです……」

俺は、なんとか呟いた。

どうやら意識がぶっ飛んでたらしい。

途端に奔る激痛。

自分の体が思うように動かない。

「意識はあるんだな!? 祥介君! ?」

「……はい……」

「そうか、良かった。そうだ、小奈美ちゃんは! ?」

「小奈美……? そうだ! ! 小奈美は! ? ぐっ……! !」

俺は、急に起きあがろうとして、激痛に苛まれた。

「動いちゃダメだ! ! 酷いケガだぞ! ! 今救急車を呼んでる」

「俺のことより、小奈美を、小奈美を……！！」

俺は、必死に叫んだ。

何か、嫌な予感がする。

さつきから、俺の目の端に映っているあの赤い物体。

嫌な予感がする。

嫌な予感がする。

嫌な予感がする。

「おい、こつちに女性が倒れてるぞ！！」

俺の耳に、そんな言葉が聞こえてくる。

「小奈美……！！」

俺は、激痛の中、無理矢理立ち上がり、声のしたほうではなく、  
何故か『赤い物体のあるほうへ歩いていった。』

「祥介君！？」

おじさんが驚いてる。

でも、今は、そんなことより、この赤い物体を……。

この赤い物体は、どうやら人間のようだ。

この赤い物体は、どうやら女性のようだ。

この赤い物体は、どうやら茶髪のようにだ。

この赤い物体は、血に染まっているようだ。

この赤い物体は、息をしてないようだ。

もうよそう。

これ以上見るのは。

失礼だ。

人間に対して物体なんて言うのは。

だから、最後に顔を見よう。

そうさ。

俺は早く小奈美を見つけなくちゃならないんだ。

だから顔を……俺は見た。

それは……。

「じ、な……み……」

俺は、急に体中の痛みが無くなった。

代わりに、何かやたらうるさい音が聞こえる。

耳障りだ。

これは誰かが叫んでる声だ。

うるさい。

うるさい。

うるさい。

止めろ、と言おうとしたのに言えない。

ああ、俺の口が開いてるからか。

俺の口が既に声を発しているからか。

俺が、耳障りなほど叫んでいるからか。

けど、それもすぐに静かになった。

だって、叫んでる俺が、叫ぶのを止めたから。

目を開けているのを止めたから。

- 病院 -

俺は、ゆっくりと目を覚ました。

体中が痛い。

何でこんなに体中が痛いんだ？

そもそも、ここ何処だよ？

何で俺はこんな所にいるんだ？

えーと、俺は今日は割と早起きして、朝ご飯にトースト食べて、顔を洗って、歯磨きして、家を出て、公園に行つて、小奈美に会つて……！？

「そうだ、小奈美……！！！」

俺は無理矢理起きあがろうとして、激痛を感じた。

「ぐあっ！！そうか、事故に遭つて……」

自分の頭が冷静になったことで、思い出してしまった。

自分の見たものを。

「あ……あれは確かに小奈美『だった』」

力チャ。

病室のドアが開く。

「おや、目が覚めたようだね」

俺が視線を送ると、そこには医者が立っていた。

「君の担当医になった西部だ。よろしく。どこか痛むところはあるかい？」

白衣を着て、聴診器を首から提げた西部は優しく尋ねた。

「すみません、小奈美は、小奈美はどうなりましたか!？」

俺は、小奈美のことで頭が一杯で、自分のことの質問など後回しにした。

「小奈美……?」

「俺と一緒に女の子が、高校生の女の子がいたはずなんです!!俺は、目の前で真っ赤に染まって息をしてない小奈美を見たんだ!!小奈美は助かったんですか!？」

俺は、自分の体調も顧みずに捲し立てた。

「ちよつ、落ち着きなさい。まずは、自分のことを……」

「俺のことより小奈美を!!」

「やれやれ、しょうがない。君の言う、小奈美さんかどうかはわからないが、あの事故に巻き込まれたのは君を含めて四人。君と、男

性一人に女性二人だそうだ。ただ、うち男性と女性一人は亡くなった。」

「死んだ……？小奈美が……？」

「まだ誰が亡くなったのか私にはわからない。私が知っているのはこれだけだ。さて、君のことだが……」

俺は、あまりのことにほとんど医者の話など聞いていなかった。

しばらくしてから、八百屋のおじさんがお見舞いに来た。

「大丈夫かい？祥介君」

「おじさん……」

「何か必要な物があつたら遠慮無く言ってくれ。力になるよ」

「……………」

「今回のことは何て言っているのか、またこんなことになるなんて……………」

「……………」

「それも同じ人間に……………」

「何だって！？」

俺は今のおじさんの言葉が気になった。

「そうか、祥介君は気を失っていて気付かなかったんだね」

「どういうことですか？」

「あの男だよ。君たちの両親を奪った男さ。今は仮釈放中だったらしい。『また、飲酒運転』だったそうだ」

「ふざけやがって……!!」

「本当だよ、全く!!小奈美ちゃんも可哀想に……」

「そうだ!!おじさん、小奈美は!？」

俺は、医者の方でたことを思い出し、一縷の望みをかけおじさんに聞いた。

「そうか、まだ聞いていないんだね。なんと言えいいのか、小奈美ちゃんは……」

「やっぱり、死んだんですか……?」

俺は力無く口を開いた。

「い、いや、まだ生きているよ」

「え!？」

生きている。

生きている。

生きている。

小奈美がまだ生きている。

俺は、強ばった全身の筋肉が緩んでいくのがわかった。

「小奈美は今どこに!？」

俺はいてもたってもいられなくなった。

生きているのなら会いたい。

だが、

「まだ、小奈美ちゃんには会わない方が……」

嫌な予感がした。

「どうしてですか？」

おじさんは、言いづらそうにしながら、口を開いた。

「小奈美ちゃんは、祥介君よりも酷い怪我でね。といっても、出血の割に体の外傷自体は全治6ヶ月程度だったらしいんだけど……頭を強く打ったらしくてね」

嫌な予感がした。

「……まさか」

「いわゆる、植物人間のような状態らしい。恐らく、二度と目覚める事は無いだろうと言われたよ。」

おじさんは、悔しそうに語った。

「それに万一、目が覚めても何らかの障害があることは間違いないそうだ。今も、いつ亡くなってもおかしくない不安定な状態が続いてる」

「……そんな……」

「……祥介君」

「……小奈美……」

俺は、顔を伏せる。

これから俺はどうすればいいんだ。

どう生きていけばいいんだ。

俺の目の前は、段々暗く、見えなくなっていく。

ここが、病院だとか、静かにしなきゃとか、傷にひびくとか、いい大人が、とかそんなことは考えなかった。

ただ、泣き叫んだ。

「うわあああああああああああああああ………!」

暑い夏の日、まだセミは鳴きやまない。

## 祥介編〜第2章〜

### 祥介編〜第2章〜

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ……。

無機質な機械音が、病室に流れている。

この音は、この病室で横になる小奈美の生きている証であり、俺の絶望の証でもあった。

「……小奈美……」

小奈美は、外傷はそんなに酷くないように見える。

それでも、数多くのよくわからない機械に囲まれて、包帯だらけの俺より重体なんだと思い知らされる。

「……小奈美……」

たとえどんな風になろうと、小奈美は小奈美だ。

そんな思いで彼女の病室に来たが、早くも俺の『自己満足』は崩れそうだった。

「……小奈美……」

俺は、この病室に来てから彼女の名前しか発していない。

「……どうしてこんなことに……」

ようやく発した別の言葉も、この悲しみを打ち消してくれるものではなかった。

小奈美の手を握る。

いつもなら恥ずかしくなるくらい熱くなる手も、今日は冷たい。

「……小奈美……」

決して握り返されることの無い手は、強く握っても反応は当然のことながら無い。

すると、突然病室の外から喧噪が聞こえた。

「俺の怪我なんてたいしたことねーんだよー!!」

「しかし、体中打ち身なんですから……」

「知るか!! またこんな事故起こしちゃってこっちは金がねーんだ!!」

「ですが……」

「こっちはまたたつぷり賠償金払わされるんだ!! その前に遊んできて何が悪い!!」

俺の中に、ドス黒い感情が渦巻く。

「だいたい、あんなトコにいたガキ二人がわりーんだ!」

- - - ガギン - - -

俺は、自分の頭の中にある撃鉄が落ちたのを体で感じた。

ふざけるな。

ふざけるな。

ふざけるな。

頭に、熱いものが込み上げてくる。

俺は、考えることなく病室を出た。

「おい……」

「あん……なんだてめえ……?」

撃鉄が、再び起きあがって、

- - - ガギン - - -

落ちる。

ドガアアアア! - - - !

殴った。

思いつきり。

普段なら、力一杯殴ったらこっちの手が痛くなるのに、そんな正常な思考回路は俺の中に存在していなかった。

殴られた男は、自分の顔に手を当てながらこっちを睨んでいる。

「痛っ！！っのガキ！！」

上等だ。

俺は間髪入れずに蹴りを放つ。

「ぐわっ！！」

男が怯む。

まだ酒が抜けきっていないみたいな千鳥足だ。

ふざけやがって。

殴る殴る殴る。

蹴る蹴る蹴る。

ふざけやがってふざけやがってふざけやがって……！！！！！！

「……止めないか！！」

誰かが俺を止める。

俺は、無表情で目の前にいる顔がボコボコになった男を見下ろす。

口から血を流し、頬は腫れ上がり、涙を流している。

俺は、まだ冷め切らない頭で思ったことを口にした。

「……小奈美は、もつと痛かったんだ……」

麻痺している俺の拳から鮮血が滴り落ちる。

「……君の気持ちもわかるが、これはやりすぎだ。下手をすると君が罪人扱いにされるぞ」

俺を止めた奴、白衣を身に纏った見たことのある奴が言った。

「あ……」

俺は、ようやく頭が冷えてきたようだ。

じんじんと拳が痛む。

俺を止めたのは西部とかいう俺の担当医だった。

「……ようやく落ち着いたかい？」

「……はい」

「よし、じゃあ君は自分の病室に戻りたまえ。あとで看護師を回すから手の手当を受けなさい」

「……………」

俺は、何も言わずにこの場を立ち去った。

このまま病室に戻る気は無かった。

とにかく、何処か遠くへ行きたい、そう思っていた。

気付けば、俺は病院を後にしていた。

俺は、すっかり日の暮れた町を歩いている。

特にアテはない。

ただ、夢遊病患者のようにふらふらとその辺をよたつく。

今は、周りの明るささえ鬱陶しい。

とにかく人気の無い方へ無い方へと進んでいた。

いつの間にか、周りには人気どころか外灯すら無い町はずれまで来ていた。

それでも俺は歩くのを止めない。

止めたくない。

しかし、事故にあったばかりの俺が、そんなに体力が残っているはずもなく、足がもつれてきた。

そのうち、小石につまずいて転ぶ。

「痛っ……」

俺は、転んだまま起きあがらなかった。

起きあがる気力も無い。

「……小奈美……」

知らず、彼女の名前を呟く。

しばらくそうしていたが、俺は気怠くなった体に鞭打って起きあがった。

こんな所にいてもしょうがない。

黙って病院を出てきたし、やっぱり小奈美の傍にいてやりたい。

俺は立ち上がり、あたりを見回した。

「ここ、何処だ？」

あまり見たことのない場所。

だが、遠くに何かの掲示板が見える。

俺はその掲示板に近づいた。

その掲示板には、かなり昔の何かの記事が貼り付けてあった。

大きな見出しの入った記事は、破れていたり掠れていたりして、全然読めない。

だが、この掲示板には、『時司神社』と書かれている。

「ときつかさ……？ああ……あの過去に戻れるとかいう曰く付きの神社か……随分遠くまで歩いて来てたんだな」

俺は、ここが時司神社の入り口付近だと把握した。

「時を遡る、か……、本当にそんなことが出来たら小奈美を助けられるだろうか……」

馬鹿らしい。

俺はそんな迷信信じちゃいない。

だが、いつの間にか足は神社の中に伸びていた。

「うわ……真っ暗だ」

辺りには外灯が無い。

あるのはうつすらと照らされる月明かりのみ。

俺は、神社の中央に小さい木造の小屋を見つけた。

両開きになるであろう戸が片方開いている。

俺は、恐る恐る中に入ってみた。

中に入ってみると、部屋の隅にはお社があった。

およそ六畳といったくらいの狭い小屋。

そんな小屋の隅にぽつんとある小さなお社。

およそ2尺といったところか。

ここは何に使われていた物なんだろう。

俺は溜息を吐いた。

（何やってんだろ、俺……）

こんな所にいつまでいたって意味は無い。

（さっさと帰ろう……）

俺は、急に虚しくなって踵を返した。

すると、

『カタン』

音がした。

振り返ってみると、お社の戸が開いている。

おかしい。

さっきまでは確かに閉まっていたはずだ。

俺は、不審に思いながらも社に再び近づく。

すると、社の中には何かの紙が入っていた。

「なんだコレ？」

俺はそれを手に取ろうとして、躊躇った。

いくらなんでも罰当たりではなからうか。

だが、そんな考えとは裏腹に、体はその紙を手にとって開いてしまった。

何か書いてあるソレに、俺は釘付けになった。

☞ 草木も眠る丑三つ時に

社にてこれを詠みし者

汝へ回帰の扉開かれん

心せよ開かれるは一度

心せよ喪者は帰らない

犯した咎は喪われない  
』

そこまで読んでいた時、

『パタン』

自分が入ってきたときの戸が急に閉まった。

「えっ!？」

急な出来事に頭が追いついていかない。

いつの間にか、自分が持っていた紙が、うつすらと緑色の輝きを放ち始める。

「な、なんだコレ!？」

『 機会の与一はこれかぎり

汝求めるならば右の戸を

汝求めぬならば左の戸を

現世全ての魂に憐れみを  
ㇿ

俺が、全部読み終わると同時に、紙の光が消えた。

俺の目の前には、俺が入ってきた時の戸がある。

ごくり、と唾を飲み込む。

馬鹿馬鹿しい。

迷信なんて信じない。

俺の額から汗が流れる。

手が震える。

パサリ、と俺の手から紙が落ちる。

俺はどうしたらいい？

これは何かのイタズラか？

そうに違いない。

こんなことがあるはずない。

そう思いながら、俺の手は、自然と右の戸に伸びていた。

ゆつくりと、手が戸に触れる。

手が戸に触れた途端、戸の隙間から先程の紙と同じような緑色の光が漏れ出てくる。

「！！」

迷っている暇はない。

イタズラ？

だから何だ。

迷信だからありえない？

だから何だ。

木造独特の軋みを上げながら、戸が僅かに開く。

漏れ出てくる緑の光は、どんどん強くなる。

俺は、もう一度唾を飲み込む。

深呼吸する。

そして、

力一杯に、

戸を開けた。

途端に広がる緑色の光。

眩しくて目を開けていられない。

腕で目を覆いながら、

「……小奈美っ!!」

俺は今日何度目になるかわからない彼女の名を呼んだ。

いつまでそうしていたのかわからない。

俺が気付いた時、俺は掲示板の前にいた。

時司神社の掲示板。

いつの間にかここまで来たんだろう？

ぼやけた頭で考える。

ふっと、空を見上げる。

じりじりと暑い日差しが照りつける晴れた空。

照りつけられる日差しは、俺にも容赦無く降り注ぐ。

何ら不思議のない夏の情景。

セミはミンミン鳴いている。

「何で俺はここにいるんだっけ？」

まるで寝起きのように頭が働かない。

「今何時だ……？」

小奈美とお揃いで買った俺の時計は、午前三時を示している。

「おいおい、そんなわけないだろ……今はどう見ても九時過ぎだ。早くもイカれたのかこの時計……今こんなに明るいんだ、か、ら……????」

辺りを見回す。

人一人としていない『朝』の風景だ。

「おいおい、マジか……？」

さっきまで真夜中だったはずだ。

いや、俺の中ではまだ真夜中だ。

それは俺の腕時計が証明している。

「今日は何日なんだ……？ いや、そんなことよりも！」

俺は走った。

もう約束の時間はとうに過ぎている。

もし、今日が本当に『あの日』なら、俺は今頃小奈美と歩いている筈だ。

気付けば俺の服装は、包帯を巻く前の『今朝』の服装になっている。

体の痛みもない。

息を切らしながら商店街に着く。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

だが、休んでいる暇はない。

刻一刻と時間は迫っている。

そして、俺はとうとう『俺たち』を見つけた。

楽しそうに談話している『俺たち』

ああ、八百屋のおじさんにかかわれている。

何故か、涙が零れた。

小奈美が、まだ笑っている。

元気に、傷一つ無い体で生きている。

間に合った、俺がそう思い、息を吐こうとした時、『それ』は来た。

暴走トラック。

これが突っ込んできたために小奈美は……。

よく見れば、トラックは小奈美の方に真っ直ぐ走っていく。

俺は叫びながら駆けだしていた。

「危ない!!!」

俺の声に、『俺』が反応するのがわかった。

必死に走る。

小奈美まであと5m。

小奈美まであと3m。

小奈美まであと1m。

俺は、小奈美を思いきり突き飛ばす。

「きゃあっ!？」

小奈美は悲鳴を上げながらもトラックから遠ざかる。

「よし……!!」

俺が安心したのも束の間。

暴走トラックは俺へ一直線に走ってくる。

俺まであと50cm。

俺まであと30cm。

俺まであと10cm。

俺まであと……。

もはや俺に考える事は出来ない。

直撃。

なすすべ無く潰される。

痛いとか、怖いとか、そんな感情すら無い。

ただ、吹き飛んだ。

空高く舞上げられ、地面に叩きつけられる。

不思議だ。

凄い衝撃だったのに痛みを感じない。

『心せよ開かれるは一度』

こんなに血が出てるのに痛みを感じない。

『心せよ喪者は帰らない』

全く動けないのに痛みを感じない。

『犯した咎は喪われない』

痛みを感じないのに、今この瞬間だけ、意識が残ってる。

その意識が、いつか見た紙の内容を繰り返している。

いつの間にか、動けない俺の方に、よろよろになった小奈美が近づいて青い顔をしている。

良かった、小奈美は無事だ。

本当に良かった。

そう思いながら、意識を手放す前に、

- - - あの事故に巻き込まれたのは君を含めて四人。君と、男性一人に女性二人だそうだ。ただ、うち男性と女性一人は亡くなった -
- 

何故か医者が言っていたことを思い出していた。

## 小奈美編 第1章

### 小奈美編 第1章

じりじりと暑い日差しが照りつける晴れた空。

照りつけられる日差しは、屋外にいる人間に等しく降り注ぐ。

何ら不思議のない夏の情景。

セミはミンミン鳴いているし、歩く人達はみんな汗を浮かべてる。

この町は、特に夏が暑い。

私は、そんな自分の生まれ育った町の、公園のベンチに座っている。

この町唯一の、噴水のある公園。

私は、この『待ち合わせの場所』で『彼』を待っている。

この町は、都心から離れていて本当に何も無い。

あるといえば、有名かどうかは知らないけれど、過去に遡ることが出来るっていう『迷信』がついた時司神社くらい。

でも、私はこの町が嫌いじゃない。

そう思えるのは、これからここに来る『彼』のおかげだ。

彼の名譽のために言っておくと、彼は遅刻なんてしていない。

むしろ、いつも約束の時間の10分前には着く。

でも私は、いつも30分前にはこの『待ち合わせ場所』にいる。

苦手な早起きをしてでも、祥くんを出迎えたいから。

ほら、祥くんがもうすぐそこまで来てる。

私は、いつもの微笑みを浮かべて立ち上がる。

「おはよう！祥くん！」

「おはよう、小奈美」

祥くんは、笑顔で挨拶を返してくれる。

真っ黒な髪に、私より少し高い背丈。

私は十分高いと思うけど、祥くんはよく、

「あと5cmは背が欲しいな」

なんて言ってる。

私としては、これ以上大きくなれたらちょっと困る。

背伸びしても祥くんの顔に届かなくなっちゃうから……。

今日の祥くんは、一見普段と変わらないように見えるけど、実はちよっと気を遣っているのがわかる。

学校でなら、もう少し頭がハネてるもん。

「ねえ、祥くん」

「……………」

私が話しかけても、祥くんが返事をしない。

気になって祥くんの顔を見ると、いつものあれらしい。

祥くんは、よく私の顔を見て黙り込む。

どうしてなのか良くわからないから、理由を聞いたたら、

「ああ、すまんすまん。今日も小奈美の可愛さに見とれてた」

とか言って私をからかう。

「しし、祥くんっ！な、なな何っいいいい！？」

私は、わたわたしながら取り繕う。

私だって女の子だし、こんな事言われたら嬉しい。

でも、恥ずかしいからやっぱり意地を張っちゃう。

「も、もうつ！いつつもそんな嘘ばかり！」

私はついそっぽを向いてしまう。

けど、いつだってそんな私を祥くんは笑顔で見えてくれる。

うう、そんな微笑み反則だよ。

私たちは、物心ついた時から一緒にいた。

家がお隣通しなのもあって、家ぐるみのお付き合いも多かった。

でも、私たちが小学４年生の時、そんな家ぐるみのお付き合いで行った旅行の帰りに、事故にあった。

車と車の交通事故。

相手は大型トラックの運転手で、飲酒運転だった。

車は大破し、あたり一面炎上した。

私と祥くんは、衝撃により車の窓から放り出された。

凄く怖くて、痛かった。

私はわんわん泣いた、と思う。

というのは、私が泣いたかどうかは、実はハッキリと覚えていない。

覚えているのは、暖かい優しい腕。

そして、

「大丈夫、大丈夫」

という祥くんの声。

私は、祥くんがこの時私を庇ってくれてたのを後になって知った。

祥くんの背中には、私を庇った時の傷が今も残ってる。

ごめんね……、祥くん……。

その後、私たちは、相手からの賠償金と両親の生命保険、という多額のお金と引き替えに、家族を失った。

私たちは、一夜にして天涯孤独になった。

そう、私たちには運悪く、近しい親戚がいなかった。

でも、幸いなことに、私たちの事故の裁判を受け持ってくれた弁護士が、祥くんのお父さんの友達で、私たちの身元引受人になった。くれた。

といっても、その人は数年後には仕事の都合で海外に行くことになってしまった。

私たちは、まだ外国に行くには不安があり、結局、二人で日本に残る事にした。

それ以来、私たちは基本的には二人で協力して生活してきた。

私たちが、周りに付き合ってるように見られたのは高校生からだけで、祥くんからは、ずっと前に告白してもらってた。

事故後、すぐの私は、生きる気力が無かった。

「……一人になっちゃった……」

そんな私に、祥くんは言ってくれた。

「何言ってただよ小奈美、俺が傍にいるよ!」

嬉しかった、けど、素直に私は受け取れなくて、

「……でも、もう私には家族はいない……」

祥くんの優しさを突き放してしまった。

なのに祥くんは、

「じゃあ、俺が家族になる」

そう言ってくれた。

私は、その祥くんの言葉に縋り付きたかった。

「……本当?……どうやって?」

そしたら、思いもよらぬ答えが返って来た。

「小奈美が俺のお嫁さんになってよ」

「…………え？」

「俺がずっと傍にいて、家族になるから、小奈美が俺のお嫁さんになつてよー!」

私は、ポカン、としていたと思う。

「な、何言ってるの祥介くん？」

この頃、私はまだ祥介のことをそう呼んでいた。

「俺が、ずっと小奈美といるから…………将来結婚してよ!」

私は嬉しかった。

『祥介くん』がそんなふうに思っていてくれてたなんて。

だから、

「…………幸せにしてくれる？」

「…………え？」

「『祥介くん』、よろしくね」

私は、この時から、将来祥介くんのお嫁さんになりたいと思うようになった。

祥くんは、高校生になる時、お揃いで腕時計を買ってくれた。

私は左利きなので『右手』に、祥くんは右利きだから『左手』に。

特に特別な細工のある時計じゃないけど、祥くんにとって、婚約指輪のようなものみたいだった。

祥くんがちゃんと私のことを思ってくれてるのが嬉しかった。

私たちは、高校を卒業したら籍を入れるつもりだ。

あと1年。

長いようで短かったが、きっと籍を入れたとしても私たちの生活は変わらない。

私は、そんな将来のことを楽しみにしながら、祥くんの手を引いた。

「祥くん、行こっ!」

今日は、もう何回目になるかわからないデートだ。

「そうだな。今日は何処行きたい?小奈美」

「んーとねえ……」

私は、顎に人差し指をあてて考えながら、商店街へと足を向けた。

いつもと変わらないデートコース。

特に予定が決まっていなければ、二人でこうやってあちこちぶらぶらする。

それがいつの間にか決まっていた二人のデート。

そんな時、向かいから歩いてきた女の人が、祥くんにぶつかった。

その途端、女の方はバックを落とす。

落ちたバックから、いくつか物が零れた。

「あ、すいません」

祥くんは、すぐ謝りながら拾うのを手伝う。

女の方も、謝りながら物を拾っていた。

そのうち、祥くんが落ちているハンカチに手を伸ばす。

「「あ……」」

偶然、女の方もハンカチを拾おうとしたらしい。

二人の手が重なった。

おもしろくない。

まだ二人とも固まってるし。

あ、相手の女の人なんか赤くなってる。

「…………コホン」

私は小さく咳払いをした。

途端に動き出す二人の時間。

「あ、ああ、すみません!!」

「あ、いえ、こちらこそ!!」

二人は同じように謝りながら立ち上がった。

全て拾い集め、軽く会釈してお互い別れる。

私は膨れていた。

私のいる目の前で、祥くんが他の女の人といるのが嫌だった。

こんなの醜い嫉妬だと頭ではわかっていても、納得できない。

「こ、小奈美？」

祥くんが焦ったように話しかける。

「私なんてどうでもいいんだ」

私は、そっぽ向きながら言い放つ。

「そんなことないって!!」

祥くんは何とか取り繕おうとしている。

私が、しばらく黙っていたからか、祥くんが心配そうに聞く。

「小奈美？まだ怒ってるのか？」

「怒ってないもん!!」

私は、明らかに怒っています、というような発言をしてしまった。

「ただ、ハンカチ拾っただけじゃないか」

「……………」

「俺は小奈美以外の奴と付き合う気なんかないよ？」

もちろん、祥くんはその気が無いことはわかってる。

でも時々不安になる。

「だって……祥くんかつこいいから……すぐ誰かに取られちゃいそうで……」

「おいおい……」

杞憂だよ、というような祥くん。

でもそうは思えない。

そもそも、うちの高校に一体どれだけ祥くんのファンがいると思っているんだろう。

祥くんは知らないかもしれないけど、うちの高校には祥くんのファンクラブまで極秘裏に出来ている。

私は、内心溜息を吐きながらも微笑んでいた。

祥くんが、私以外の人と付き合う気なんかない、と言ってくれたので今回は良しとしよう。

そんなこんなで、いつの間にか商店街の中心辺りまで歩いていた時、私たちは急に声を掛けられた。

「おっ、祥介君に小奈美ちゃん。今日も仲がいいね」

八百屋のおじさんだ。

「えへ、ありがとうございます」

私は、若干照れながらも答えた。

私たちは、よくこうやってからかわれる。

「今日もデートかい？」

「え、ええ、まあ」

祥くんが曖昧に答える。

あれは祥くんがテレてる証拠だ。

「仲が良いのは良いことだよ。まっ、今度何か買いに来た時にはサービスしてあげるからいつでもおいだよ」

「はい、ありがとうございます」

昔から私たちの境遇を知っている人は、こうやってよく声をかけてくれる。

そんな人たちは私たちにとって、いわば親みたいなものだった。

この八百屋のおじさんも、そんな人の一人。

「まあ、車に気おつけていきなよ」

「はい」

そう言っただけ私たちは八百屋さんを後にする。

「車か……」

「嫌でも思い出しちゃうね……」

私たちは交通事故で家族を亡くしてる。

車の危険性は十分承知しているつもりだ。

それなのに、私は『それ』が近づいてきているのに、気付くのが遅

れた。

隣にいるはずの祥くんの声が、何故か後ろから聞こえる。

「危ない！！」

『それは、

スローモーションで、

『私たち』に、

突っ込んで、

来る。

逃げなきゃ、いや、カワセナイ、そう思った時、誰かが私を思いきり押した。

「きゃあっ！？」

突き飛ばされる私。

でも、おかげで私は直撃のコースから外れた。

振り返ると、そこには私がいたところに祥くんがいた。



「そうか、良かった。そうだ、祥介君は!？」

「祥くん……?あ……!!」

私は、急に起きあがろうとして、激痛に苛まれた。

「動いちゃダメだ!! 酷いケガだぞ!! 今救急車を呼んでる」

けど、私はそんなものには構わず、おじさんの話も聞き流して最後に見た光景を思い出していた。

嫌な予感がする。

さつきから、私の目の端に映っているあの赤い物体。

嫌な予感がする。

「おい、こっちに男性が倒れてるぞ!!」

私の耳に、そんな言葉が聞こえてくる。

「祥くん……!!」

私は、激痛の中、無理矢理立ち上がり、声のしたほうではなく、  
何故か『赤い物体のあるほうへ歩いていった。』

私は、満足に歩けなかったが、それでも気になった赤い物体まで来た。

途端、私は青ざめた。

その赤い物体は、いや、『ヒト』は、私のよく知る人物に……似ていた。

「祥……くん……？」

口から名前が漏れる。

私は、血まみれの愛しい人を見て、気を失った。

## 小奈美編 第2章

### 小奈美編 第2章

- 病院 -

私は、ゆっくりと目を覚ました。

体中が痛い。

何でこんなに体中が痛いんだろう？

えっと、ここは何処？

何で私はこんな所にいるの？

え〜と、私は今日は祥くんを待つために早起きして公園に行って…  
…！？

「そうだ、祥くん……！！」

私は起きあがろうとして、激痛を感じた。

「くうっ！！あ、そうか、事故に遭って……」

自分の頭が冷静になったことで、思い出してしまった。

自分の見たものを。

「あ……あれは確かに祥くん『だった』」

カチャ。

病室のドアが開く。

「おや、目が覚めたようだね」

私が視線を送ると、そこには医者が立っていた。

「君の担当医になった西部だ。よろしく。どこか痛むところはあるかい？」

白衣を着て、聴診器を首から提げた西部さんは優しく尋ねた。

「すみません、祥くんは、祥介くんはどうなりましたか!？」

私は、祥くんのことと頭が一杯で、自分のことの質問など後回しにした。

「祥介……?」

「私と一緒に男の子が、高校生の男の子がいたはずなんです!私  
は、目の前で真っ赤に染まっている祥くんを見ました!祥くんは  
助かったんですか!？」

私は、自分の体調も顧みずに捲し立てた。

「ちよつ、落ち着きなさい。まずは、自分のことを……」

「私のことより祥くんを!!」

「やれやれ、しょうがない。君の言う、祥介君かどうかはわからないが、あの事故に巻き込まれたのは君を含めて四人。君と、男性二人に女性一人だそうだ。ただ、うち男性一人と女性は亡くなった。」

「死んだ……? 祥くんが……?」

「まだ誰が亡くなったのか私にはわからない。私が知っているのはこれだけだ。さて、君のことだが……」

私は、あまりのことにほとんど西部さんの話など聞いていなかった。

しばらくしてから、八百屋のおじさんがお見舞いに来た。

「大丈夫かい? 小奈美ちゃん……」

「おじさん……」

「何か必要な物があつたら遠慮無く言ってくれ。力になるよ」

「……………」

「今回のことは何て言っているのか、またこんなことになるなんて……………」

「……………」

「それも同じ人間に……………」

「えっ!？」

私は、今のおじさんの言葉が気になった。

「そうか、小奈美ちゃんは気を失っていて気付かなかったんだね」

「どういうことですか？」

「あの男だよ。君たちの両親を奪った男さ。今は仮釈放中だったらしい。『また、飲酒運転』だったそうだ」

「そんな……!!」

「本当だよ、全く!!祥介君も可哀想に……」

「そうだ!!おじさん、祥くんは!？」

私は、西部さんの言ってたことを思い出し、一縷の望みをかけおじさんに聞いた。

「そうか、まだ聞いていないんだね。なんと言えいいのか、祥介君は……」

おじさんのその態度に、私はだんだん青くなっていった。

「い、いや、まだ『生きては』いるよ……」

おじさんは、私の顔を見て、大慌てで言った。

「え!？」

生きている。

生きている。

生きている。

祥くんがまだ生きている。

私は、強ばった全身の筋肉が緩んでいくのがわかった。

「祥くんは今どこに!？」

私はいてもたってもいられなくなった。

生きているのなら会いたい。

だが、私はさっきのおじさんの言葉をよく聞いていなかった。

そう、『生きては』という言葉。

「まだ、祥介君には会わない方が……」

嫌な予感がした。

「どうしてですか？」

おじさんは、言いづらそうにしながら、口を開いた。

「祥介君は、小奈美ちゃんよりも酷い怪我でね。といつても、出血の割に体の外傷自体は全治6ヶ月程度だったらしいんだけど……頭を強く打ったらしくてね」

嫌な予感がした。

「……まさか」

「いわゆる、植物人間のような状態らしい。恐らく、二度と目覚める事は無いだろうと言われたよ。」

おじさんは、悔しそうに語った。

「それに万一、目が覚めても何らかの障害があることは間違いないそうだ。今も、いつ亡くなってもおかしくない不安定な状態が続いてる」

「……そんな……」

「……小奈美ちゃん」

「……祥、くん……」

私は、顔を伏せた。

私のせいだ。

私を庇ったために祥くんはこんな事に……。

私は、祥くんがいなければ、生きてなんていけない。

私の目の前が、段々暗く、見えなくなっていく。

ここが、病院だとか、静かにしなきゃとか、傷にひびくとか、いい大人が、とかそんなことは考えなかった。

ただ、泣き叫んだ。

「うわあああああああああ……！！！！！！！！！」

暑い夏の日、いつの間にかセミの声は止んでいた。

- 祥介の病室 -

。。。。。ッピ、ッピ、ッピ。

無機質な機械音が、病室に流れている。

この音は、この病室で横になる祥くんの生きている証であり、私の絶望の証でもあった。

「……祥くん……」

祥くんは、外傷はそんなに酷くないように見える。

それでも、数多くのよくわからない機械に囲まれて、包帯だらけの私より重体なんだと思ひ知らされる。

「……祥くん……」

わずかな期待を胸に、祥くんの病室へ来た。

でも、その希望も、あっさりと打ち砕かれた。

「……祥くん……」

私は、この病室に来てから彼の名前しか発していない。

「……どうしてこんなことに……」

ようやく発した別の言葉も、この絶望を打ち消してくれるものではなかった。

祥くんの手を握る。

いつもなら、恥ずかしがってすぐ離そうとする祥くんの手も、反応が無い。

「……祥くん……」

何も反応の無い手は、強く握っても何も起こらない。

すると、突然病室の外から喧噪が聞こえた。

「俺の怪我なんてたいしたことねーんだよー!」

「しかし、体中打ち身なんですから……」

「知るか！！またこんな事故起こしちゃってこっちは金がねーんだ！！」

「ですが……」

「こっちはまたたつぷり賠償金払わされるんだ！！その前に遊んできて何が悪い！！」

私の中に、ドス黒い感情が渦巻く。

「だいたい、あんなトコにいたガキ二人がわりーんだ！！」

――ブツン――

私の頭の中にある何かが切れた。

頭に、熱いものが込み上げてくる。

私は、考えることなく病室を出た。

「……………」

男の前に仁王立ちする私。

「あん……なんだてめえ……？」

全く悪びれる様子のない目の前の男。

――ブチン――

さっきよりも確かな音をたてて、頭の中が切れる、いや、キレル。

パン!!

叩いた。

思いつきり。

普段なら、力一杯叩いたらこっちの手が痛くなるのに、そんな正常な思考回路は私の中に残っていなかった。

叩かれた男は、自分の顔に手を当てながらこっちを睨んでいる。

「痛っ!!っのアマ!!」

私の中のドス黒い感情はおさまらない。

「……してよ」

男が、私の胸倉を掴む。

「あ?何言ってたんだ、コイツ?」

「……返してよ」

「はあ!?!」

男が私の顔を覗き込む。

「私の……祥くんを返してよ!!」

私は思いっきり男の腕に噛みついた。

「痛っ、ざけんなこのアマ!!」

思い切り殴られる。

痛い、けど、こんなの祥くんが受けた痛みの10分の1にも満たない。

男は、まだ酒が抜けきってないみたいな千鳥足だ。

「!!止めないか!!」

誰かが男を止める。

「うるせえ!!この女が!!」

「誰か警察を!!」

男を止めたのは、西部さんだった。

すぐに警察を呼ぶよう周りに言う。

「君、大丈夫かい!？」

西部さんは、心配そうに声をかけてくる。

「……はい」

「……落ち着いたかい？とりあえず君は自分の病室に戻りたまえ。  
あとで看護師を回すから手当を受けなさい」

「……………」

私は、何も答えずこの場を去った。

このまま病室に戻る気は無かった。

とにかく、何処か遠くへ行きたい、そう思っていた。

気付けば、私は病院を後にしていた。

私は、すっかり日の暮れた町を歩いている。

特にアテはない。

ただ、夢遊病患者のようにふらふらとその辺をよたつく。

今は、周りの明るささえ鬱陶しい。

とにかく人気の無い方へ無い方へと進んでいた。

いつの間にか、周りには人気どころか外灯すら無い町はずれまで来ていた。

それでも私は歩くのを止めない。

止めたくない。

でも、事故にあったばかりの私が、そんなに体力が残っているはずもなく、足がもつれてきた。

そのうち、小石につまずいて転ぶ。

「痛っ……」

私は、転んだまま起きあがらなかった。

起きあがる気力も無い。

「……祥くん……」

知らず、彼の名前を呟く。

しばらくそうしていたけど、私は気怠くなった体に鞭打って起きあがった。

こんな所にいてもしょうがない。

黙って病院を出てきたし、やっぱり祥くんの傍にいたい。

私は立ち上がり、あたりを見回した。

「ここ、何処？」

あまり見たことのない場所。

遠くに何かの掲示板が見える。

私はその掲示板に近づいてみた。

その掲示板には、大きな見出しの入った記事が貼ってあるが、破れていたり掠れていたりして、全然読めない。

でも、この掲示板には、『時司神社』と書かれている。

「ときつかさ……？ああ……あの過去に戻るっていう神社……随分遠くまで歩いて来てたのね」

私は、ここが時司神社の入り口付近だと把握した。

「時を遡る、か……、本当にそんなことが出来たら祥くんを助けられるかな……」

そんなことを考えていた私は、いつの間にか神社の中に入っていた。

「……真っ暗」

辺りには外灯が無い。

あるのはうつすらと照らされる月明かりのみ。

私は、神社の中央に小さい木造の小屋を見つけた。

両開きになるであろう戸が片方開いている。

私は、恐る恐る中に入ってみた。

中に入ってみると、部屋の隅にはお社があった。

部屋の隅にぼつんとある小さなお社。

およそ2尺くらいの大きさ。

ここは何に使われていた物なんだろう。

私は溜息を吐いた。

（何やってるのかな、私……）

こんな所にいつまでいたって、過去になんて戻れない。

（さっさと帰ろう……）

私は、急に虚しくなって踵を返した。

すると、

『カタン』

音がした。

振り返ってみると、お社の戸が開いている。

おかしい。

さっきまでは確かに閉まっていたはず。

私は、不審に思いながらも社に再び近づく。

すると、社の中には何かの紙が入っていた。

「何かな、コレ？」

何か書いてある紙を手についた私は、ソレに釘付けになった。

『草木も眠る丑三つ時に

社にてこれを詠みし者

汝へ回帰の扉開かれん

心せよ開かれるは一度

心せよ喪者は帰らない

犯した咎は喪われない  
』

そこまで読んでいた時、

『パタン』

自分が入ってきたときの戸が急に閉まった。

「えっ!?!」

いつの間にか、自分が持っていた紙が、うつすらと緑色の輝きを放ち始める。

「も、もしかしてこれって……」

私の中に天啓ともういうべき閃きが奔る。

私は、藁にも縋る気持ちで続きを読んだ。

『 機会の与一はこれかぎり

汝求めるならば左の戸を

汝求めぬならば右の戸を

現世全ての魂に憐れみを

』

私が、全部読み終わると同時に、紙の光が消えた。

私の目の前には、私が入ってきた時の戸がある。

ごくり、と唾を飲み込む。

もし、これである時に戻れたなら、祥くんを助けられる？

私の額から汗が流れる。

手が震える。

パサリ、と私の手から紙が落ちる。

私の手が、ゆつくりと左の戸に伸びていく。

手が戸に触れた途端、戸の隙間から先程の紙と同じような緑色の光が漏れ出てくる。

「！！」

漏れ出てくる緑の光は、どんどん強くなる。

私は、もう一度唾を飲み込む。

深呼吸する。

そして、

力一杯に、

戸を開けた。

## エピソード

### エピソード

眩しいほどの緑色の光。

目を開けていられない。

私は思わずしゃがみ込んだ。

目を閉じていてもわかるほどの光。

いつまでそうしていただろう。

私は、いつの間にか光が弱くなっていることに気付いた。

顔を上げる。

そこは、時司神社の掲示板の前だった。

いつの間にここまで来たんだろう？

疑問に思いながら、空を見上げる。

じりじりと暑い日差しが照りつける晴れた空。

照りつけられる日差しは、私にも容赦無く降り注ぐ。

何ら不思議のない夏の情景。

セミはミンミン鳴いている。

「本当に……戻って来た、の……？」

にわかには信じられなかった。

だが、信じざるを得ない。

さっきまで真夜中だったはずの空に、日が昇っている。

私の勘違いじゃないことは、祥くんのくれた腕時計が証明している。

それなら私がやることは一つ。

私は走った。

もう約束の時間はとうに過ぎている。

もし、今日が本当に『あの日』なら、私は今頃祥くんと歩いている筈だ。

気付けば、私の服装は、包帯を巻く前の『今朝』の服装になっている。

体の痛みも、殴られた傷もない。

息を切らしながら商店街に着く。

「はあ、はあ、はあ……」

だが、休んでいる暇はない。

刻一刻と時間は迫っている。

そして、私はとうとう『私たち』を見つけた。

楽しそうに談話している『私たち』

ああ、八百屋のおじさんにからかわれている。

何故か、涙が零れた。

祥くんが、まだ笑っている。

元気に、傷一つ無い体で生きている。

間に合った、私がそう思い、息を吐こうとした時、『それ』は来た。

暴走トラック。

あの人が突っ込んできたために祥くんは……。

暴走トラックは、私じゃなく、あの時の『私』の方に真っ直ぐ走っていく。

私は駆けだしていた。

「危ない!!」

祥くんの声がする。

必死に走る。

この後、祥くんが私を庇う筈だ。

その前に祥くんを助ける。

だが、私が、『私』まで向かう途中、『ありえないもの』を見た。

「きゃあっ!?!」

『私』が、悲鳴を上げながらトラックから遠ざかる。

『私』を後ろから押しているのは祥くん。

そして、『私』の隣『にも』祥くん。

「祥くんが二人……?」

私が二人の祥くんに驚いている時、二人の祥くんは暴走トラックが向かう。

私は、無我夢中で祥くんを助けようとした。

『心せよ開かれるは一度』

私は、『私』の隣にいる祥くんを押す。

『心せよ喪者は帰らない』

私は、硬直している祥くんを見る。

『犯した咎は喪われない』

私の中で、いつか見た紙の内容が、繰り返し流れてくる。

直後、何かを考える間もなく吹き飛ばされる私。

今度は、地面に落ちても何も感じなかった。

いや、感じる事が出来なかった。

もう目が開かないから。

痛みを感じられないから。

動く事はできないから。

そんな中、私は誰かの泣き叫ぶ声を聞いて安堵した。

ふっと、力が抜ける。

そうして私は、もう二度と戻ることは無い意識を手放す前に、

- - -あの事故に巻き込まれたのは君を含めて四人。君と、男性二人に女性一人だそうだ。ただ、うち男性一人と女性は亡くなった -  
- -

何故か西部さんが言っていたことを思い出していた。

- 病室 A -

俺は、ゆっくりと目を覚ました。

体中が痛い。

何でこんなに体中が痛いんだ？

そもそも、ここ何処だよ？

何で俺はこんな所にいるんだ？

えーと、俺は今日は割と早起きして、朝ご飯にトースト食べて、顔を洗って、歯磨きして、家を出て、公園に行って、小奈美に会って  
……！？

「そうだ、小奈美……！！」

俺は無理矢理起きあがろうとして、激痛を感じた。

「ぐあつ！！そうか、事故に遭って……」

自分の頭が冷静になったことで、思い出してしまった。

自分の見たものを。

「あ……あれは確かに小奈美『だった』」

途端に体が震える。

そんな筈は無い。

俺は、遠くで女性がいるというのを聞いたじゃないか。

きっと小奈美は無事だ……。

俺は、重たい体を引きずってベッドを降りる。

何の面白みも無い白い病室。

ここは一人部屋のようだ。

こんな所にいてもしょうがない。

俺は、激痛が奔る体に鞭打って、小奈美を探すために病室を出た。

- 病室B -

私は、ゆっくりと目を覚ました。

体中が痛い。

何でこんなに体中が痛いんだろう？

えっと、ここは何処？

何で私はこんな所にいるの？

えーと、私は今日は祥くんを待つために早起して公園に行って…  
…！？

「そうだ、祥くん……！！！」

私は起きあがろうとして、激痛を感じた。

「くうっ！！あ、そうか、事故に遭って……」

自分の頭が冷静になったことで、思い出してしまった。

自分の見たものを。

「あ……あれは確かに祥くん『だった』」

途端に体が震える。

そんな筈は無い。

私は、遠くで男性がいるというのを聞いたじゃない。

きっと祥くんはそっちに……。

私は、重たい体を引きずってベッドを降りる。

何の面白みも無い白い病室。

ここは一人部屋のようだ。

こんな所にいてもしょうがない。

私は、激痛が奔る体に鞭打って、祥くんを探すために病室を出た。

そして、

私は、

俺は、

廊下に出た途端、探し人に出会った。

「祥……くん……？」

「小奈……美……？」

包帯をつけた痛々しい姿だが、間違いなく生きている小奈美が俺の目の前にいた。

包帯をつけた痛々しい姿だけど、いつもと変わらない祥くんが私の目の前にいた。

「大丈夫か、小奈美!？」

「大丈夫なの祥くん!？」

「こんなに包帯して、痛いところはないか!？」

「こんなに包帯だらけで、痛いところはない!？」

お互いに同じ事を言って相手を気遣う。

「俺は大丈夫だ、それより小奈美は!？」

「私は平気だよ、それより祥くんは!？」

またも同じ台詞。

「.....」

「.....」

同時に沈黙。

そして、

「ははっ」

「ふふっ」

同時に笑いあった。

「良かった、小奈美」

「良かった、祥くん」

どちらからともなく抱きしめあう。

「「本当に良かった」」

心の底から安堵した二人は、極上の笑みを浮かべる。

しかし、そんな幸せ空間をぶち壊しにするように、『ソイツ』はやってきた。

「俺の怪我なんてたいしたことねーんだよー!!」

「しかし、体中打ち身なんですから……」

「知るか!! またこんな事故起こしちゃってこっちは金がねーんだ!!」

「ですが……」

「こっちはまたたっぷり賠償金払われるんだ!! その前に遊んできて何が悪い!!」

看護師の制止も聞き入れずに、唯我独尊を通そうとする男。

俺はソイツに見覚えがあつた。

私は、この人に見覚えがあつた。

「お前は……!!」

「あなたは……!!」

「あん？何だえめえら!？」

男は、千鳥足でふらつく。

まだ酔いが覚めきっていないのか。

俺は、怒りを抑え切れなかった。

私は、怒りを抑え切れなかった。

「ふざんけんな!!」

「ふざけないで!!」

俺は、右手で殴った。

私は、左手で叩いた。

「へブウ!!??」

男の左頬に俺のコブシが、

男の右頬に私のビンタが、

それぞれ炸裂し、奇声を上げて倒れた。

そんな男を見下ろす俺たち。

そんな男を見下ろす私たち。

その場に居合わせた西部なる医者、

「見なかった事にしよう」

と言ってくれた。

俺は小奈美と、

私は祥さんと、

手を繋ぎながら微笑んだ。

小奈美と繋いでいる俺の右手。

祥さんと繋いでいる私の左手。

そんな『右手』にある、

そんな『左手』にある、

『お揃いの時計』は、『同じ時間』で『止まって』いた。

おそらく、事故の衝撃で壊れてしまったのだろう。

壊れてもなお輝く、二人のエンゲージリングともよべるその時計は、『草木も眠る丑三つ時』で止まっていた。

次の日、ある新聞の記事が全国を騒がせた。

『悲劇・飲酒運転での事故再び!!!』

そう大きく見出しの入った記事。

（昨日午前十時半ごろ、飲酒運転の事故が起った。

容疑者は、以前にも同様の事故を起こしており、また、偶然にも、被害者の中には以前起きた事故の被害にあっているものもいた。

被害者は男性二人に女性二人の四名。

うち、軽傷の男性一人と女性一人が以前にも同じ人物に被害にあつた者だ。

彼らは、再び徹底的に容疑者を訴える構え。

被害にあった者のうち、残りの二人は、『意識不明の重体』の上、『身元不明』となっている。

特徴として、二人は同じ時計をしており、男性は『左手』に時計を、女性は『右手』に時計をしている。）

時司神社の掲示板。

誰が貼ったのか、この『見出しの大きい記事』は、時司神社の掲示板の全面を飾っていた。

その掲示板に触れるように、一陣の風が吹く。

近くにある樹齢数十年の木が揺れる。

風で木の葉が舞う。

舞った木の葉は神社の中まで飛んでいく。

木の葉は、神社の真ん中にある古い古い小屋まで飛んでいく。

いつの間にか、蝉時雨は止んでいる。

その小屋は、両開きになるであろう扉が、片方だけ開いている。

中には、小さい小さいお社がある。

そのお社が、小さい音を立てて片方だけ開く。

そこから漏れ出る緑の光。

この光は、

誰に見つかる事も無く、

静かに消えた。

ゆっくりと、小さい小さい社が閉じる。

再び、古い古い小屋に風が吹く。

『また』、五月蠅いぐらいにセミが鳴きだした。

夏は、まだまだ終わらない。

そんな終わらない夏を、始まった夏を、拒むかのように、受け入れるかのように、静かに静かに小屋の戸が閉まった。

世の中の知られていない不思議。

貴方は知っていますか？

どこかに通じる秘密のトンネルや、こことは違った別の世界への扉。

貴方は知っていますか？

神様になる事の出来る杖や、人の一生が既に記されている石版。

貴方は知っていますか？

『時』を『遡る事が出来る』という『迷信』の神社。

貴方は知っていますか？

意識不明だった身元不明の二人。

貴方は知っていますか？

この二人が奇跡的に目を覚ましたとか覚まさなかったとか。

貴方は知っていますか？

この二人がその後、取り壊しを待つばかりだった神社に住み始めたとか、始めなかったとか。

貴方は知っていますか？

その後、永きに渡り、二人はこの神社を守ったとか守らなかったとか。

貴方は知っていますか？

いつのまにか、代を重ねるごとに、この神社は由緒正しい神社と言

われるようになったとかならなかったとか。

貴方は知っていますか？

どんな『迷信』も『迷信』になる理由が存在する。

貴方は知っていますか？

草木も眠る丑三つ時に

社にてこれを詠みし者

汝へ回帰の扉開かれん

心せよ開かれるは一度

心せよ喪者は帰らない

犯した咎は喪われない

機会の与一はこれかぎり

汝求めるならば……

汝求めぬならば……

現世全ての魂に憐れみを

貴方は知っていますか？

## エピローグ（後書き）

これにて完結です。ここまで読んでくださった方、もしいましたら  
ありがとうございます。かなり前からの構想を文字として起こすの  
に随分とかかってしまいました。補足として、病院で、二人の時計  
の位置が逆だった事に気づいた方、あれは間違いではありません。  
『喪者は還らない』です。ですが、最後はやはり『現世全ての魂に  
憐れみを』ですね。もし疑問点や間違いがありましたら、いつでも  
受け付けます。それではみなさん、重ね重ね読んで頂きありがとう  
ございました。最後に、『全ての読者の方々に幸福を』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9325e/>

---

夏の日<sup>なつひ</sup>の出来事

2010年10月8日23時51分発行